

子どもに「死」をどう教えるか

—自殺を未然に防ぐための心育て—

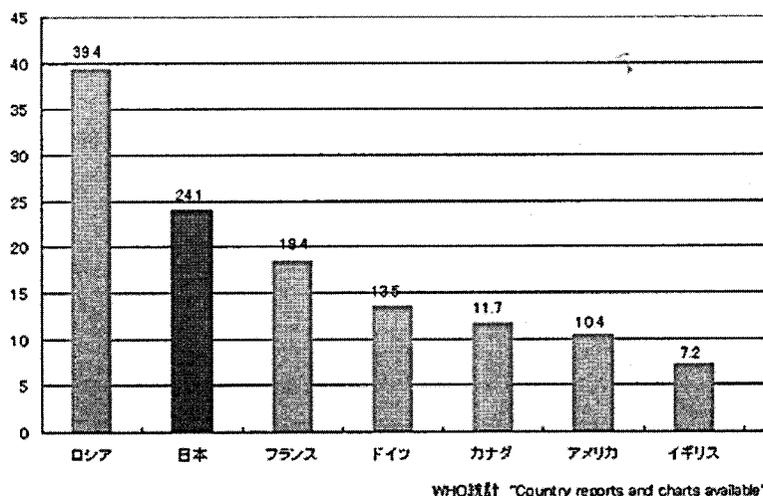
細井八重子

(沙羅の会 カウンセリングハウス/桜美林大学大学院)

子どもに「死」をどう教えるかということは、とりもなおさず生き生きとした「命」をどう育むかということにつきますでしょう。それは母の胎内に命が芽生えたときに始まり、誕生の喜びを経て、生れたその日からかけがえのない「命」として大切に守り育てることです。自ら成長しようとする内からのエネルギーを尊び、体の発達に則して、子どもなりの心のありようや、喜怒哀楽を尊重することができたら、たいていの子どもは活発に活動し、生き生きと輝くようになるでしょう。

それにもかかわらず、19歳までに自分で命を絶つ青少年の数は、日本全国で毎年500人を越えています。¹

世界の自殺率(G8:2000年)



1 いじめによる自殺

子どもの自殺の要因はいくつか考えられますが、その一つとしていじめによる自殺があります。小森香澄さん² (15歳) が自殺したのも、楽しみにしていた高等学校に入学して、わずか4ヶ月のことでした。部活動の友達によるいじめが原因だったとされています。部活動の中で、容赦ない悪口

¹ 参考資料 「自殺者統計」自殺対策支援センターライフリンク

² 小森美登里『優しい心が一番大切だよ』WAVE 出版 2002

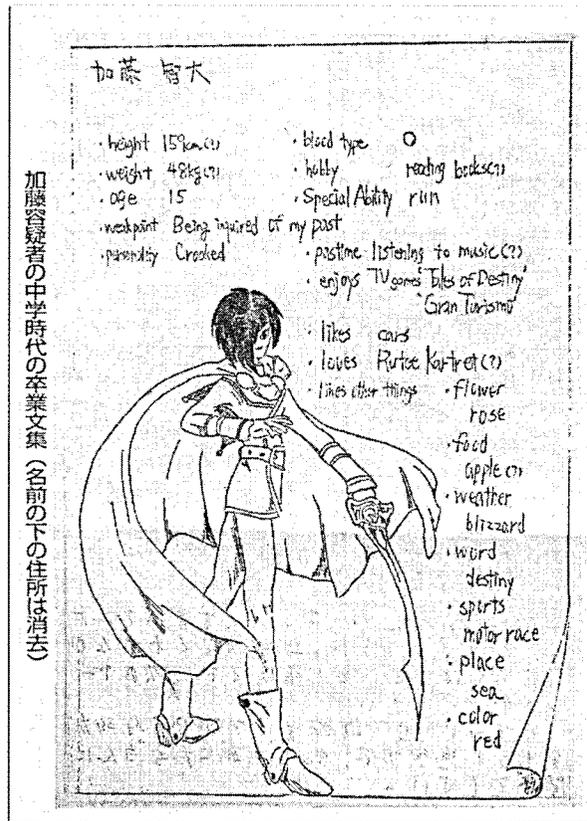
や仲間はずれにだんだん拍車がかかり、それを快感とする心理が動いていたようです。友達はもちろん大事ですが、悪ふざけが度を過ぎると、集団心理にはまりこんで、なかなか歯止めがきかなくなる場合があります。こうした集団によるいじめに負けない「知恵」を育ておくことも、やはり必要だったのではないのでしょうか。香澄さんは「優しい心が一番大切だよ」という言葉を遺して命を絶っています。清らかな心のまま亡くなったとも言えるかもしれませんが、しかけられたいじめに対する正当な怒りもあつたはずで、その気持ちを外に出せずにはいたのはどんなに辛いことだったろうと思わずにはられません。お母さんの無念さについては察するに余りあります。



2 プライドの傷つきによる自殺

子どもも大人も自分なりのプライドを守り、自分の可能性に向かって成長していく使命のようなものがあって、その使命を追及するという楽しみが人生にはあるように思います。そのプライドをめぐって、大人と子どもはときに対立します。父親に成績のことで叱られたり、大切にしていたものを踏みにじられたりしたことを苦にしてさまざまな事件を起こしたり、自殺したりというニュースがしばしば報じられています。2008年6月に起きた秋葉原殺傷事件の加藤智大容疑者も、その一人でしょう。彼が中学時代に描いたという絵を新聞で見ました。きらりと光る短剣をかざし、マントを風になびかせた騎士の絵です。こうした「カッコよさ」への憧れが少年時代から思春期にかけて火を噴くことはよくあることです。適度なナルシズム、自己愛、うぬぼれがあってこそ勇気もわくものです。しかし、等身大の自分の力を知っていくことが生きていくためには必要なのです。それには周りの評価にてらして自分を調べなおしてみたり、叱責されることによって、自己を制限し

たり、ときにはたわめたりもしなければなりません。これが教育の働きの一つです。この教育は成長の度合いに応じたものであることが望ましいのですが、これがなかなか難しい。大人も子どもも、およそ人間関係の中のトラブルは、感情のコントロール力が未熟で、ゆがみやコンプレックスを持って生きていることに起因するものと言えます。私たちは、自分には他人に触れられるとひどく動揺する感覚や情動があることにどれだけ気づいて、感情や思考を豊かに発達させていくことができるのでしょうか。これは私たちの永遠の課題です。



3 自殺ごっこ遊びによる事故死

日本で年間3万2千人の自殺者がいるということは、1日あたりおおよそ88人の人が亡くなっているわけです。1人の自殺者が出ると、他の人にも伝染するような心理（心理学用語でいうウェルテル効果）が動くとも言われます。そうしたニュースは、子ども達の耳にも入っていることでしょう。その事実がどのように子どもに伝わっていくのか、どう伝えたらよいのか難しいことではありますが、「命」についてきちんと伝える機会とすることができるかもしれません。私は子どもの頃、父から「首をつるまねなどするなよ、間違っで死んでしまった子がいる」と諭されたことがあります。その真剣な面持ちに、子どもなりにそれは恐ろしいことと思い、神妙な気持ちになったことを

覚えています。

また、子どもを取り巻く環境では、今や、テレビアニメやゲームが日常となっています。そこには愛、闘いや病、死のテーマを取り扱ったものが数多くあります。闘いは子ども達の興味をそそり、やがてごっこ遊びに展開していきます。身体を張って、勝つことの喜びや負けることの悔しさの渦に巻き込まれます。とても悲しい気持ちになって、自殺の真似事をする子も出てきます。はっきりと死ぬつもりではなく、大事に至ってしまうこともあります。そうなる前にどこかで大人の介入が必要でしょう。子どもの気持ちに共感しつつ、手加減すること、あるところでセーブすること、「負けるが勝ち」の場合もあることなど、さまざまなかのルールを教える工夫をしなければなりません。そして、「死」は元気な子ども達にとっても、けっして無縁ではないことをしっかりと伝えることです。

私は子どもの心の中にある「死」への関心をタブーとするのではなく、幼い頃から一つのテーマとして取り上げ、少しずつ育てられたら良いと思います。虫や動物の「誕生と死」、身内の「老いと死」なども子どもなりにどのように分かっているのか見守りたいものです。

4 問題を持つ子どもへの対応

『14歳とタウタウさん』³という絵本があります。それははじめと浮浪者と死とウラマツヨシオの物語です。子どもの心の成長が、実は死と隣り合わせであることを感じさせてくれるお話です。

主人公ヨシオの父が突然いなくなります。家族中の驚きと複雑な気持ち。それを知らうともしないワルガキたちは、ヨシオをからかっていじめます。ヨシオはついにキレて、激しい怒りのあまり、ワルガキの一人をもう少しで刺し殺しそうになります。その出来事があつた夜から、ヨシオは頭痛と熱にうなされ、学校を休みます。友達ばかりでなく、学校の先生たちもまた、ヨシオの問題行動だけを取り上げて叱り、登校停止の罰を与えるのでした。ヨシオは死んでしまいたいほどの情けなさ、みじめさの中に深く沈みこみます。

そんな中で彼は、心やさしい人々とふれあいます。まず、ヨシオの祖父です。祖父はヨシオのために校長先生と対決して、退学もやむなしと認め、父親を探す旅に出たいというヨシオの願いを聞き入れます。また、やり場のない怒りを弟にぶつけるヨシオに、うまいものを腹いっぱい食べさせながら、「弟の気持ちも分かってやれ」とやさしく諭してくれたりもします。もう一人は、担任の若い女の先生です。いわゆる教師としての力量には欠けるのですが、自分を精一杯出して、友達のようにヨシオを見守ってくれました。また、分教場に転校して行った元担任は、ワルガキたちを悔い改めさせることができなかつた自分の無力さに涙を流し、ヨシオとともに語り合います。そして最後に、ふいに現われては消える、不思議な存在感を持つのが、この絵本のタイトルにもなっている浮浪者のタウタウさんです。長い竹竿を持ち歩いて、村中のすす払いなどをすることで、その日の食べるものをつないでいるようなヨレヨレのおじいさんです。ヨシオはその姿に、どこか遠いところで生きているであろう父親の姿を重ねていきます。そしてヨシオは、チンピラからそのタウタウ

³ 梅田俊作・佳子作・絵『14歳とタウタウさん』ポプラ社 1998

さんを助けようとするとき、機転の効いた底力が湧いてくるのです。

子どもが生き生きと生きるのがますます難しい時代になった、と言われる中、私も子どもの心に寄り添い、子どもの生きようとするまっすぐな気持ちを育む、そんな大人の一人になれることを願って、カウンセラーの職務を果たしていきたいと考えています。

「14歳とタウタウさん」

梅田俊作／佳子 作・絵

